

# 佐那河内村の淡水魚

淡水魚班（徳島県淡水魚研究会）

中野 晴夫\*<sup>1</sup>

## 1. はじめに

淡水魚班は、佐那河内村の園瀬川、嵯峨川及び支流の音羽川に生息する魚種と分布を特定することを目的として2001年7月20日から8月27日の間、調査をおこなった。調査に間しては地点を設定し、潜水調査による生態、生息状況の観察をおこない、水中ノートに記録した。たも網を使用し幼魚も調べた。また聞き取り調査を実施し、投網による調査も許可を得ておこなった。川魚の伝統的な捕獲方法や食べ方について聞き取りし、内容を記述した。『佐那河内村史』（1967）には淡水魚についての記述が次のようにある。「アユ、ナマズ、モツゴ、ウグイ、アブラハヤ、オイカワ、カワムツ、フナ、コイ、ドジョウ、シマドジョウ、ウナギ、ヨシノボリ、アメゴ（昔在り、今無し）」この中で、モツゴはムギツクのアブラハヤはタカハヤの誤りである。フナはギンプナのことであり、ヨシノボリはカワヨシノボリのことであり、アメゴの正式な和名はアマゴである。アマゴは現在放流されている。

## 2. 調査結果

佐那河内村を流れる園瀬川と、支流である嵯峨川と音羽川において、調査地点1～18を設定し、調査した（図1）。いずれの川も年間を通して透明度は良く、陸上から魚影を確認することができる。

今回の調査で、佐那河内村に生息が確認できた淡水魚は18種であった。ニジマス、アマゴ、コイ、アユ、ウナギの5種は漁業組合で幼魚を購入し、園瀬川に放流している。調査した場所では、ニジマス、コイの泳いでいるのは確認できなかった。

調査地点①では瀬の付近は10cmから20cmの大きさの石が多くあり、ケイソウ類がびっしりついている（図2）。これをオイカワが、数百匹の群れになり食べていた。オイカワの体長は7cmから13cmのものである。オイカワの群れに混じって体長12cmのムギツクが3個体から5個体の群をつくり食べていた。体

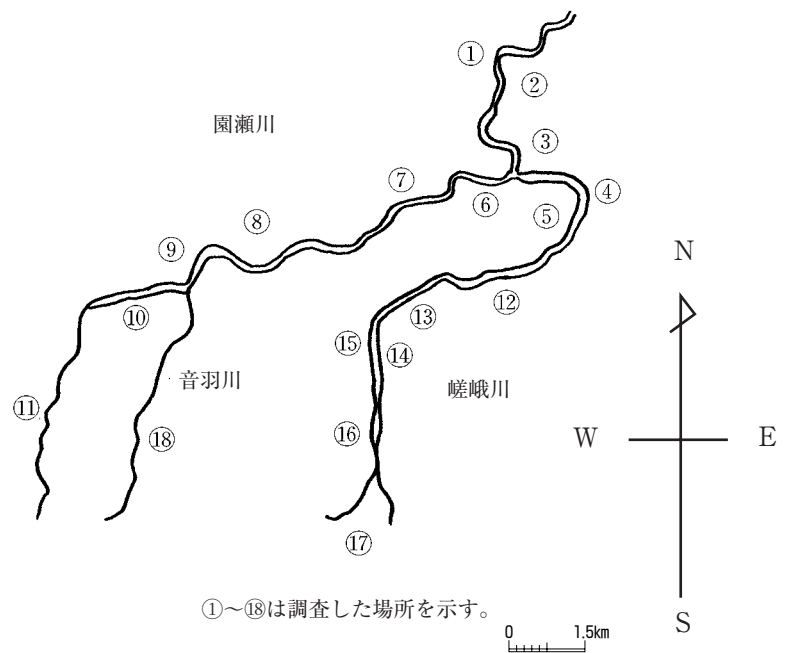


図1 調査地点

- ①一の瀬 ②尾境 ③おちあい橋 ④寺谷橋 ⑤寺谷 ⑥高樋 ⑦根郷東  
⑧井関 ⑨北山 ⑩宮前 ⑪西井田西 ⑫荒瀬 ⑬中嵯峨 ⑭上嵯峨東内  
⑮蔵宝寺 ⑯妃代野橋下流 ⑰妃代野谷川 ⑱音羽

\* 1 徳島県立城ノ内高等学校



図2 調査地点①

長が3 cmから7 cmのカワムツもいたが個体数は少ない。水深が2 mある深い場所にはコンクリートブロックが多く置かれている。ここには水藻が多く繁殖していて、茎たけも高く2 mもあった。この場所にはニゴイが多く生息していた。体長が20cmから30cmのものが多くいて、数十個体の群れをなしていた。体長40cmの大きなニゴイも1個体いた。水藻の生い茂る場所には体長3 cmから13cmのオイカワが多くいた。体長3 cmから12cmのカワムツも同じ場所にいた。体長が13cmのムギツクは10個体の群をなしていた。体長が2 cmの小さい幼魚は3個体が岸近くにおいて、岩についているケイソウを食べていた。ギンブナは体長25cmのものが1個体いた。また体長12cmのカマツカが3個体いた。

調査地点②では岸が岩盤の場所であった。岩盤の下は水深が2 m程あった(図3)。体長15cmから20 cmのニゴイが20個体群れをなしていた。瀬になり水流が早い場所は、体長3 cmから5 cmのオイカワが百個体程の群れをなしていた。同じ場所にはカワムツ、ムギツクもいたが、個体数は少ない。体長12cmのウ



図3 調査地点②

グイも3個体いた。カワヨシノボリは体長2 cmのものがいたが個体数は少なかった。体長10cmのスゴモロコは岸辺の水草付近にいた。30個体の群れになっていた。流れのないおだやかな場所に多かった。水流がなく広く停滞していて、水深2 cmの場所ではオイカワ、カワムツの幼魚で、体長3 cmのものが多くいた。

調査地点③のおちあい橋付近ではカワヨシが多くはえている。瀬になっている所では水流が早く、直径10cmから20cm程の石で敷き詰められていて、藻類が付着している。水深は10cmである(図4)。体長10 cmのカワムツが20個体の群れをつくり、泳いでいた。体長7 cmから13cmのオイカワも個体数は少ないが、泳いでいた。13cmのムギツクも群れで泳いでいた。



図4 調査地点③

調査地点④の寺谷橋付近では岸が岩盤になっている場所があり、水深が1.5mある。水流はなく穏やかである(図5)。この場所にはニゴイが多い。体長20cmのニゴイが30個体群れになっていた。体長40 cmも2個体いた。岩盤の底の部分には体長40cmのマ



図5 調査地点④

ナマズ 1 個体いた。水深10cmの所では砂とレキの場所が広くあった。体長 2 cmから 3 cmのカワムツが多く生息していた。1 cmの幼魚もいた。カワムツの幼魚が育っている場所である。体長 3 cmから 5 cmのオイカワがカワムツに混じって生息していた。体長10 cmのカマツカが 3 個体いた。

調査地点⑤ではツルヨシが多く生えており水流が早い。水が流れている場所は 1 mあり、川底は直径 20cm程の石で敷き詰められている (図 6)。体長 3 cmから 5 cmのオイカワが多く生息している。川底には体長 3 cmのカワヨシノボリが多い。



図 6 調査地点⑤

調査地点⑥では川底はレキであり、大きさが 5 cmから 10cmのもので一杯である。川岸は自然の岩盤でできた所とコンクリートでできた所がある。藻類が多く付着している。水流はほとんどなく穏やかである (図 7)。水深が 10cmの場所では、体長 7 cmから 10cmのムギツクが 3 個体いた。体長 5 cmの幼魚は、5 個体が群れになっていた。体長 12cmのシマドジョウが 2 個体いた。体長 12cmのギンブナが群れになり 7 個体いた。体長 2 cmから 3 cmのカワヨシノボリが



図 7 調査地点⑥

いたが、個体数は少ない。自然の岩盤の付近は水深が 1 mあり深い。体長 12cmのムギツクとオイカワがいたが、個体数は少ない。コンクリートでできた堰があり、直径 60cm程の円筒の中に水がそそぎ込まれるようになっている。その下には水流が早い窪地ができています。ここには多くの魚が集まっていて、300個体程いた。魚には正の走流性があるからである。いずれの魚も活動的でいきいきしている。体長が 10cmから 12cmのカワムツが多くいた。体長 10cmから 12cmのオイカワも多くいた。体長 15cmの雄も多い。体長 20cmの大きなカマツカが 1 個体いた。体長 12cmから 15cmのムギツクも十数個体いた。

調査地点⑦では川底は砂レキ底である。多くは砂だが大きき 20cmから 30cmの石が点在する。水の透明度は良い。水流は穏やかな流れであった。川岸はコンクリートでできているが、岸にはツルヨシが多く生えている (図 8)。体長 2 cmから 3 cmのオイカワの幼魚が、20個体群れていた。幼魚が育っている大事な場所である。体長 12cmのシマドジョウがいた。体長 15cmのカワムツが 1 個体いた。体長 10cmのカマツカが 3 個体いた。体長 15cmのギンブナが 1 個体いた。両岸のツルヨシが生えている場所には、体長 2 cmから 5 cmの幼魚が群れをつくって岩についている藻類を食べていた。



図 8 調査地点⑦

調査地点⑧では水流は穏やかな流れである。川底には 1 m程の大きな岩が点在し直径 5 cmから 10cmの

レキで一杯である（図9）。アユは体長15cmと13cmが2個体いた。体長15cmのオイカワの雄が3個体いた。体長5cmの幼体のオイカワがいたが個体数は少ない。体長2cmから5cmのカワヨシノボリは5個体いた。体長15cmから12cmのシマドジョウが5個体いた。



図9 調査地点⑧

調査地点⑨の出会い橋付近では、瀬になっている場所がある（図10）。そこにはカワヨシノボリが多くいる。30cm四方の面積の中に12個体いた。体長は2cmから3cmの幼魚が多いが5cmの生体もいた。コンクリートでつくられている場所では、体長が15cmから13cmのカワムツが5個体群れになって泳いでいた。体長12cmのドンコが1個体いた。



図10 調査地点⑨

調査地点⑩では、水流はほとんどなくゆるやかで、川底は砂質であるが、直径30cm程の石が点在している（図11）。体長3cmから4cmのカワムツの幼魚が多くいたが、7cmの成魚もいた。シマドジョウが多く、体長15cmから20cmの成魚が15個体いた。成魚のスジシマドジョウが1個体いた。体長12cmのドンコが1個体いた。

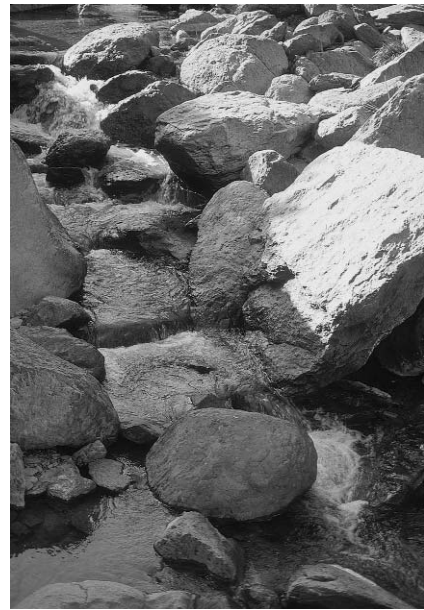


図11 調査地点⑩

調査地点⑪では直径3mほどの大きな岩が点在していて瀬になっている（図12）。水流はあり体長5cmのカワヨシノボリが多い。体長13cmのカワムツが1個体と1cmのカワムツ幼魚が、水のたまった場所にいた。



図12 調査地点⑪

調査地点⑫の東丸橋付近では、瀬になっていて水流も早い。川底は砂レキで、直径1mから3mの岩が転在している（図13）。体長25cmのアユが3個体泳いでいた。体長が5cmから7cmのカワムツが50個体程群れになっていた。体長12cmのシマドジョウが3個体いた。体長5cmのカワヨシノボリが多い。集



図13 調査地点⑫

まっている所では30cm四方に10個体いた。

調査地点⑬では水の透明度は良い。川底は直径20cmから30cmの大きさの石が転在し直径2cmから3cmの小さな石で一杯である(図14)。水流の早い真ん中では、体長4cmから5cmのカワムツが20個体群れになって泳いでいた。体長13cmのオイカワの雄1個体に、体長7cmの雌が4個体一緒になって泳いでいた。体長が2cmから3cmのカワヨシノボリが多くいた。30cm四方に10個体の割合でいた。体長10cmのシマドジョウが2個体いた。体長12cmのアユが1個体いた。岩のある水深1メートルの窪地には、体長7cmと15cmのアユが2個体いた。体長13cmのカワムツが1個体いた。コンクリートで瀬が作られている場所では、体長5cmのカワムツが、30個体の群れをなして泳いでいた。体長13cmのアユが1個体いた。体長10cmのオイカワが2個体いた。



図14 調査地点⑬

調査地点⑭では瀬があり、水の流れが一カ所に流れ込む淵がある(図15)。そこにはカワムツが200個体程集まって泳いでいた。オイカワは少なく、体長

12cmから13cmが3個体いた。体長15cmのシマドジョウが2個体いた。体長7cmから10cmのカワヨシノボリがいて30cm四方には3個体いた。



図15 調査地点⑭

調査地点⑮では瀬があり水流は緩やかに流れている。直径1メートルの石が点在する。岸にはツルヨシが生えている(図16)。体長5cmのカワヨシノボリがいるが、個体数はきわめて少ない。水のたまり場には体長3cmから5cmのカワムツが生息していた。



図16 調査地点⑮

調査地点⑯では瀬になっていて水流は少し早い。直径1mから2mの岩が点在している。川底は直径20cmから30cmの石があり、砂と一緒に、敷き詰めら

れていた（図17）。体長7cmのカワヨシノボリが1個体いた。体長2cmのオイカワの幼魚が2個体いた。個体数と種類もきわめて少ない。岸边にはカワヨシが生えていた。



図17 調査地点⑯

調査地点⑰のヒヨノ橋付近のヒヨノ谷川では大きな岩が点在していた。（図18）瀬になっていて体長10cmのカワムツが5個体群れになっていた。

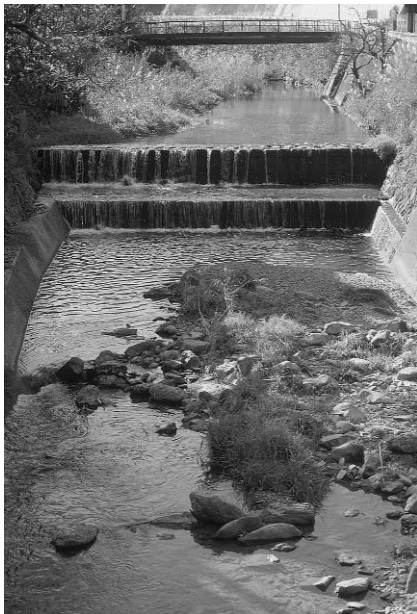


図18 調査地点⑰

調査地点⑱は支流にあたる音羽川である。瀬になっていて、水流がある。直径2mから3mの大きな岩が点在している（図19）。岩の間の淵になっている場所に、アマゴが2個体泳いでいた。体長12cmと11cmであった。カワムツは体長13cmの大きなものが1個体いた。体長4cmから6cmの幼魚が3個体いた。カワヨシノボリもいて、30cm四方に3個体いた。体長は5cmであった。



図19 調査地点⑱

### 3. 漁獲方法と料理方法

川魚の伝統的な捕獲方法や料理方法について、聞き取り調査を実施し、園瀬川漁業組合長の中林積氏（60才）より情報を得た。これは素データとしての扱いであるが、事例のひとつとして、以下に示す。30年程前、ウナギを獲るためにおこなった方法としては、ハイナワをしたり、ツツをつけたり、夜釣りをした。ツツをつけている人は現在もいる。ハイナワは10mほどの紐に1m間隔に針と糸をつけておき、針にはタニシの肉やミミズをつける方法である。ツツは竹のツツに一方にもじをつけておき、中に大きなミミズをエサとして入れておく。ツツは瀬におく。多い時には1本のツツに3～4個体入っていた。ウナギは今と変わらず、以前も蒲焼きにして食べていた。6月の田植えの時期には田圃の中にコイ、フナ、ウナギ、ナマズが入ってきた。松の古い根株を割って針金で束ねて、うけをつけたものをホテとよび、火をつけて明かりに使用した。カナツキでついたりして捕獲した。ナマズには脂肪分が多く、30～20年前には、産後にナマズのみそ汁を食べると体力がつくといわれた。アユカケは佐那河内村ではアイカガリと言っている。しかし、10年前より園瀬川では見られなくなったといわれている。以前は28cmの大きなものもいて、川の主であった。ドジョウは多くいて、ヌカをまぶして、ニワトリのエサにしてやっていた。しかし、現在はドジョウは見られなくなったようである。

ムギツクのことをトックイといい、焼いて食べた。あまりおいしくはなかった。カワムツはヤマトバエ

といい、焼いて食べた。焼いて串に刺してワラボテにさして乾かす。そして砂糖や醤油と一緒にしてツクダニにして食べた。カワムツの雄のことをゴウジといい体長30cmぐらいのもいた。焼いて食べることもあった。現在、園瀬川にはアマゴ、ニジマス、アユ、コイ、ウナギの5種を漁業組合で購入し、自主放流をしている。アユカケcottsu kazikaはアイカガリとも呼ばれ、徳島県版レッドデータブック(2001)では、準絶滅危惧カテゴリーに指定された種である。漁業関係者からの聞き取りによると、上記のように園瀬川では20~30年前にはアユカケの存在が知られていた。筆者らの今回の生息調査は短期間の限定された地点での結果であり、今後、アユカケをはじめとする貴重種の保護と環境維持・保護の視点から、より詳細な生息調査が望まれる。

文献

佐那河内村史編集委員会(1967):『佐那河内村史』4、生物(5)、魚類、21頁。  
 徳島県環境政策課(2001):『徳島県版レッドデータブック・徳島県の絶滅のおそれのある野生生物』128頁。

佐那河内村の淡水魚(後述は地方名)

- 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES
- 真口亜綱 TELEOSTOMI
- サケ亜目 Gonorhynchina
- キュウリウオ科 Osmeridae



図20 アユ



図22 カワムツB型

アユ *Plecoglossus altivelis* (図20)

サケ科 Salmonoidae

アマゴ *Salmo (Oncorhynchus) masoumacrostomus*

アメゴ (図21)

ニジマス *Salmo (Oncorhynchus) mykiss*

コイ目 Cyprinida

コイ科 Cyprinidae

ウグイ *Tribolodon hakonensis* イダ

カワムツ *Zacco temmincku* ヤマトバエ 雌 (図22)

ゴウジ 雄

オイカワ *Zacco platypus* ハイ 若人が言う (図23)

ジャコ 老人が言う

カマツカ *Pseudogobio esocinus* ヨシ (図29)

ムギツク *Pungtungia herzi* トックイ (図24)

スゴモロコ *Squalidus chankaensis* biwae

ニゴイ *Hemibarbus barbus* (図25)

ギンブナ *Carassius langsdorfu* フナ (図26)

コイ *Cyprinus carpio*

ドジョウ科 Cobitidae

シマドジョウ *Cobitis biwae* ササドジョウ (図30)

スジシマドジョウ *Cobitis taenia striata*

ナマズ目 Siluriformes

ナマズ科 Siluridae

マナマズ *Silurus asotus* ナマズ (図31)

ハゼ科 Gobiidae

カワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus* ジンゾク (図27)

ドンコ *Odontobutis obscura obscura* (図28)

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ科 Anguillidae

ウナギ *Anguillidae japonica*



図21 アマゴ



図23 オイカワ(雄)



図24 ムギツク



図25 ニゴイ (下)

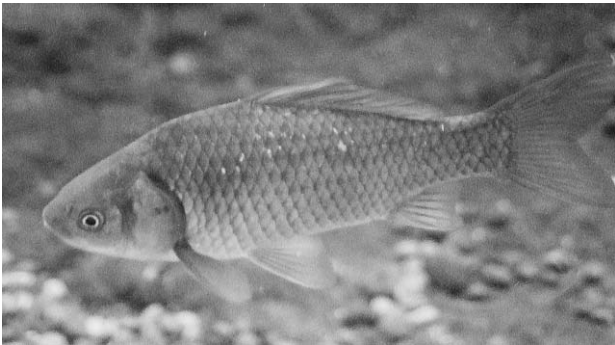


図26 ギンブナ



図27 カワヨシノボリ



図28 ドンコ



図29 カマツカ

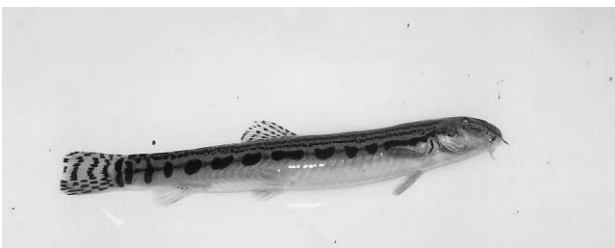


図30 シマドジョウ



図31 マナマズ